

〔東京農業イノベーションプロジェクト（受託研究）〕
高軒型ハウス養液栽培における半促成キュウリの品種比較

野口 貴・沼尻勝人・海保富士男
(園芸技術科)

【要 約】半促成作型の養液栽培で、キュウリ3品種を「超・彩軌」と比較したところ、草勢は3品種とも強かったが、5～7月における総収量は同等であった。

【目 的】

キュウリの養液栽培は全国的にみても導入事例が少なく、養液栽培を前提とした品種検討は極めて少ない。そこで、半促成作型の養液栽培において、これまでに有望と判断してきた「超・彩軌」を対照品種として長期どり品種の比較を行い、東京型栽培システムに適した品種を選定するための資料とする。

【方 法】

2015年2月26日に「超・彩軌、フレスコダッシュ、千秀2号、アドニス」の4品種と台木「ゆうゆう一輝（白）」を播種し、呼び接ぎ後、3月23日に養液栽培ベッドへ40cm間隔で定植した。活着後、各株を交互に左右へ振り分けて誘引し、株間80cm×2条の栽植（108株/100m²）とした。主枝は15節で摘心し、4本の側枝（子づる）を誘引枝としてつる下ろし整枝を行った。誘引枝以外の側枝は1節で摘心し、2次側枝（孫づる）は除去した。養液は「タンクミックスA&B」原液の2%希釈液とし、栽培ベッドの貯留液の水位が常に一定になるよう自動給液した。区制は1区3株の4反復とし、7月下旬まで収穫調査した。

【成果の概要】

1. 一定濃度の液肥を与えた結果、貯留液のEC値は8 dS/mまで上昇したが、培地底部のEC値は1.5dS/m前後で推移し、全期間を通して変動は少なく安定していた（図1）。
2. 4品種の生育をみると、子づる長は「フレスコダッシュ、千秀2号、アドニス」が500cm前後で同等、「超・彩軌」は400cm弱で有意に短かった（図2）。節数は「フレスコダッシュ」で54節、次いで「アドニス、千秀2号」の50、45節となり、「超・彩軌」は36節と最も少なかった。草勢は「フレスコダッシュ、アドニス、千秀2号」の順に強く、「超・彩軌」は4品種の中で最もおとなしかった。
3. 栽培期間中に「フレスコダッシュ、超・彩軌」でうどんこ病が発生したが、「アドニス」ではほとんど目立たず、「千秀2号」も少なかった。
4. 全収量は4品種で拮抗したが、「千秀2号」で可販果がやや多く、「フレスコダッシュ」で下物果が多かった（図3）。旬別可販果収量をみると、6月下旬までは「千秀2号」、7月上旬以降は「超・彩軌」が多かった（図4、5）。なお、7月上旬に収量が低下したのは日照時間が短かったためである。
5. まとめ：半促成作型の養液栽培でキュウリ3品種を「超・彩軌」と比較した結果、収量は拮抗した。一方、「フレスコダッシュ、アドニス」はつる長や節数からみると着果数が少なく、流れ果や飛び成りが多いと考えられる。また、つる長が長いことは栽培管理上、マイナス要因となるため、本試験では「超・彩軌」が優位となる。

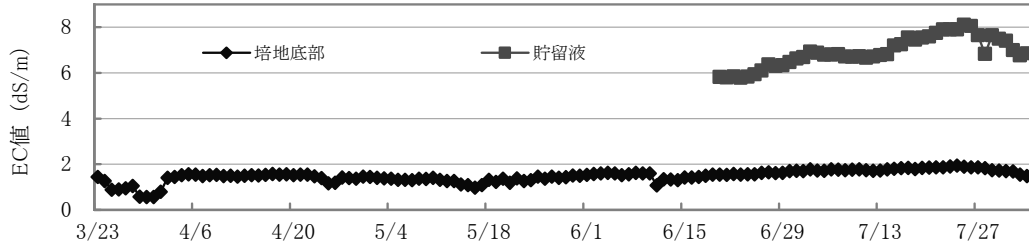


図1 栽培期間中の培地底部および貯留液のEC値の推移
(貯留液のEC値は6月下旬以降から測定)

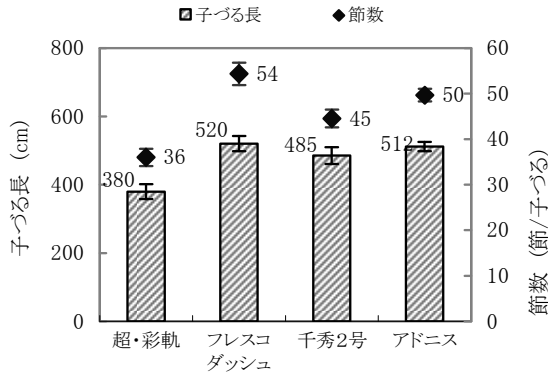


図2 つる下ろし栽培におけるキュウリ4品種の生育
(グラフ上のバーは標準誤差を示す)

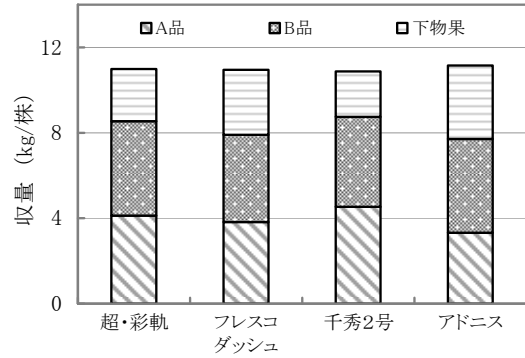


図3 キュウリ4品種の収量
(台木はいずれも「ゆうゆう輝白タイプ」)

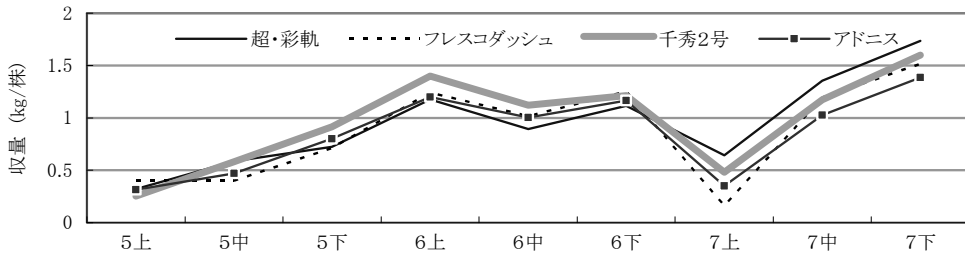


図4 キュウリ4品種の旬別可販果収量

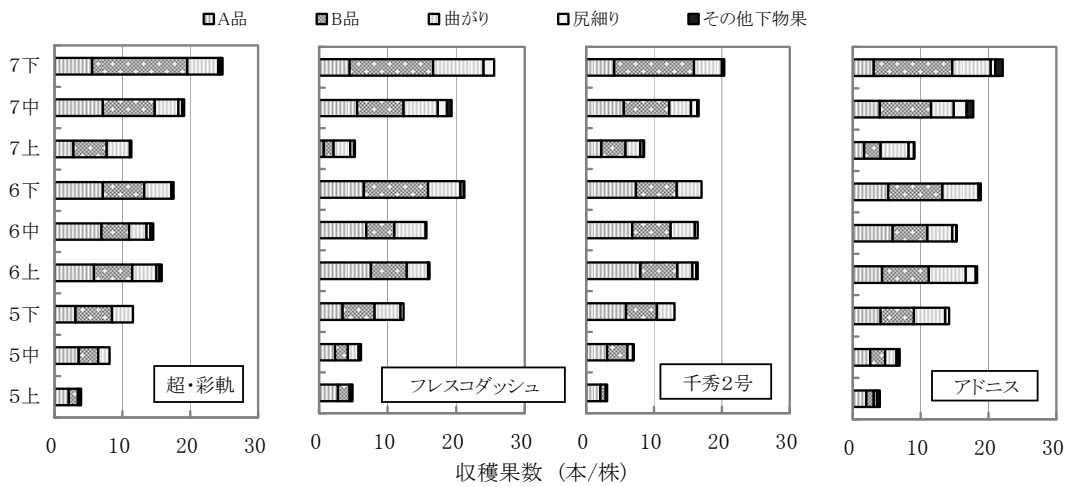


図5 キュウリ4品種の旬別収穫果数